

園外活動における子どもの発達を促す地域環境

——散歩を通した子どもの育ち——

山田 千愛^[1], 實川 慎子^[1], 高木夏奈子^[1]
栗原ひとみ^[1], 高野 良子^[1], 小池 和子^[2]

[1] 植草学園大学発達教育学部, [2] 植草学園大学保健医療学部

本研究では、保育者の語りから散歩における子どもの育ちを検討し、子どもの発達に与える散歩の効果明らかにすることを目的とした。保育所の保育者を対象とした半構造化面接の内容について Steps for Coding and Theorization (SCAT) を用いて質的分析を行った結果、32 概念、6 カテゴリーが抽出された。

全園が〈近隣の人と交流する〉に関して語っていた。子どもは保育者の率先した地域住民への挨拶等を通じた交流により、地域住民から温かく見守られている安心感をもち、社会生活とのつながりを認識するようになる。また、〈身体を動かす〉及び〈広い空間で遊ぶ〉に関して語った保育所の保育者は、保育所の敷地内で充足できない活動を園外環境で補っていることが考えられる。これらのことから保育所の散歩を通して、子どもは多様な園外環境に触れることができ、発達が促進されていることが明らかとなった。

キーワード：園外活動、散歩、地域環境、園内環境、子どもの発達

1. 問題と目的

全国的に保育所定員数、利用児童数及び保育所数は共に増加傾向にあり¹⁾、子どもを取り巻く環境は変化している。2018（平成 30）年 4 月 1 日に施行された「保育所保育指針」²⁾では、小学校就学時の具体的な子どもの姿の一つとして、子どもの「社会生活との関わり」が明示された。そこには、「保育所内外の様々な環境に関わる中で（中略）社会とのつながりなどを意識するようになる」（p. 72）と示され、保育所内だけでなく、保育所周辺の身近な環境との関わりを通した社会とのつながりについて記されている。また、領域「環境」には、新たに「日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ」（p. 26）と改訂された一文が付された。保育所保育において、身近な社会生活との

関わりはますます重要なものとなっている。

保育所保育において、子どもが身近な社会生活と関わる活動の 1 つに散歩が挙げられる。「保育用語辞典」³⁾で散歩は「1 日の流れをとくに変えないで、園の周辺に出かける日常的な活動である。季節に応じて乳児から年長児まで、地域の人々や自然に出会い、よりよい関係を育てていく機会となる」とされている。保育所の 99%は散歩をしており、80%は 1 週間に 1 回以上散歩をしている⁴⁾ことから、保育所において散歩は日常的に行われている活動であると言える。小池・定行は園外での保育を公園・児童館等の目的地での活動を主目的とする「目的地型」及び、経路地や経路そのものを楽しむことに重点が置かれ、経路にかかる時間も長い「経路型」の 2 つに分類している⁵⁾。保育所保育における散歩では目的的地や経路等全般が、子どもの発達において重要な

役割を担う場である。

保育所の散歩は、子どもが公園・広場・神社等の身近な場所で社会生活に触れる貴重な機会となっていると考えられる。このような過程の中で、子どもは多様な経験をしていることが想定される。しかし、保育所の散歩を通して子どもの発達に及ぼす効果について深く掘り下げた研究はなく、その実態はこれまでに明らかにされていない。このことから本研究では、保育者の語りから子どもの発達に与える散歩の効果を明らかにすることを目的とする。なお、本研究では、日常的に行われている保育所の散歩の実態を明らかにするために、「散歩」を「1日の流れを特に変えず保育所周辺に出かけて、季節、天気、自然、文化、近隣施設等の保育所の身近な地域社会である環境に触れる活動」と定義した。

2. 方法

2.1 調査協力者

保育所で実施している散歩は、保育所の保有敷地面積や保育所周辺の立地環境により保育内容の違いが想定された。そこで本研究では、辻川・中野が示した地域特性⁶⁾を参考に、Z市の認可保育所6園（A～F園）を抽出した（表1）。「開発新興住宅地」とは部分的に農地が残り、住宅地が散在している地域であり、「開発完了住宅地」とは農地などが住宅地として開発され、ほとんど空閑地や農地がなくなった状態の地域である。「市街地」とは近隣商業地域で住宅地と商業施設が混在し、駅や公共施設も近くに立地している地域である。

表1 調査協力園一覧

園名	園児数	敷地面積（㎡）	地域タイプ
A園	179	157,454.00	開発新興住宅地
B園	137	1,055.00	開発完了住宅地
C園	113	1,027.25	市街地
D園	25	147.67	開発完了住宅地
E園	41	305.37	市街地
F園	45	263.83	市街地

調査協力園は保育所全体の散歩を把握している保育所の所長又は主任7名（A園3名、B園2名、C園1名、D園1名、E園1名、F園1名）である。以下、保育所の所長及び主任の両者を「保育者」と記す。

2.2 調査方法

2017年12月から2018年6月までの期間に、A、C、D、E、F園は各約1時間、B園は約1時間半の半構造化面接を実施した。

2.3 分析手順

調査協力者には面接前フェイスシート及び保育所周辺の地図に主な散歩先の印の記入を依頼し、半構造化面接時の参考資料とした。半構造化面接では「インタビューシート」を調査協力者に渡し、①散歩における保育所・保育者のねらい、②地域の人との交流、③保育所周辺の地域性、④保育所独自の保育環境、の4点について尋ねた。保育者の語りから散歩の実情や子どもの発達に関わる散歩の効果を丁寧に捉えることができると考え、大谷によるSteps for Coding and Theorization(SCAT)を用いて分析した⁷⁾。SCATとは、比較的小規模な質的データの分析に適しており、4ステップにより構成概念を抽出するコーディングと、構成概念を紡いでストーリーラインを作成する手続きからなる分析手法である。コーディングの4ステップとは、①テキスト中の注目すべき語句の記入、②抽出したテキスト中の語句の言い換え、③②を説明するようなテキスト外の概念の記入、④全体の文脈を考慮したテーマ・構成概念の記入であり、必要に応じて⑤疑問課題の記入がある。

分析においては、A～F園から得られた全ての語りの逐語録を作成した。その後、保育所の散歩の効果に関する内容を分析対象としてコーディングを行い、語りの意味内容ごとに概念を作成した。抽出された構成概念を紡いでストーリーラインを作成した。さらに、複数の構成概念に共通する意味内容をまとめて上位概念であるカテゴリーを作成した。

2.4 倫理的配慮

協力者には研究目的の説明、個人情報守秘、答えたくない質問には回答しなくて良いこと等を書面と口頭で説明した。同意を得た上で、インタビュー内容をICレコーダーに録音及び筆記にて記録を行い、逐語録化した。本調査データは個人が特定されないよう匿名化処理を施した上で施錠可能な棚に保管し、筆頭執筆者以外の目に触れることのないようにした。本研究は植草学園大学の倫理委員会の承認を得て行った。

3. 結果

保育所による散歩を通して子どもが経験できる内容に関する保育者の語りを分析した結果、6カテゴリー、32概念が抽出された(表2)。6カテゴリーとは、【社会生活との関わりを通して、社会とのつながりを意識する】【自然の美しさや不思議に気づく】【体を動かす気持ちよさを感じる】【友達との関わりの中で協同性を育む】【外で過ごす気持ちよさを感じる】【周囲の環境に積極的に関わることにより思考力を豊かにする】である。最も語りの数が多かったのは【社会生活との関わりを通して、社会とのつながりを意識する】(語りの数90)であった。これらのカテゴリーから、保育所の散歩において子どもは多様な内容を経験することができ、発達が促進されていることが示された。以下では、SCATの分析結果として概念をカテゴリーごとに示し、考察を述べる。以下、文中では、カテゴリーを【】で示し、概念を〈〉で示す。また具体的な語りを「」で括り破線の下線を付し、末尾の()は園名を示す。さらに、当該の語りの意味内容を理解するために必要な先行の語りの引用や語の補足は「」中に()で示す。

3.1 社会生活との関わりを通して、社会とのつながりを意識する

【社会生活との関わりを通して、社会とのつなが

りを意識する】は、〈近隣店舗・施設の人と交流する〉〈地域環境を知る〉〈近隣の人と交流する〉〈乗り物を見る〉〈信号・陸橋を渡る〉〈ペットに触れ合う〉〈交通ルールを知る〉〈他保育所とスポーツを通じた交流をする〉〈工事現場・車両を見る〉〈緊急車両の乗車体験をする〉の10概念から成る。子どもは保育所周辺で出会う人や、地域資源を通して、社会生活と関わり、社会とのつながりを意識している。

〈近隣店舗・施設の人と交流する〉は【社会生活との関わりを通して、社会とのつながりを意識する】において語りの数が26と最も多い。例えば「太人と一緒に買いに行くってこととか、子どもに買ってきてもらう」(C園)の語りがある。保育者が保育所近隣店舗と協力することにより、子どもは遠足等で食べる果物やおやつを実際の貨幣を用いて購入している。また、近隣の図書館の利用や、警察による散歩時の安全教育により、子どもは社会とのつながりを意識する経験をしていることが明らかとなった。近隣店舗・施設の人との交流を通して、様々な人と触れ合う体験を重ね、地域に親しみを持つことができると考えられる。

〈地域環境を知る〉は、保育者が園外を散歩する際に見かけたり、気づいたりした地域社会の事象について子どもに知らせることで、子どもは自身が生活をしている地域社会に対し理解を深めている。また、保育者は子どもの小学校以降の生活を見据え、午後散歩に行く等の配慮をしていることが明らかとなった。主に保育所は午前中に散歩へ行っている⁵⁾ことから、意識的に午後に散歩へ行くことにより、子どもは小学生の下校時間帯の地域環境に触れることができる。

〈近隣の人と交流する〉は全保育所(A～F園)の保育者が語っており、子どもは散歩中に会える地域住民に対して、挨拶や会話を通して交流を図っていることが明らかとなった。「保育士がやると、じゃ、子ども達、僕たちも私たちもやっぱやるって」(D園)等の語りから、保育者が率先して子どもの見本となるように地域住民に対して挨拶や会話をして

園外活動における子どもの発達を促す地域環境

表2 子どもの発達を促す散歩の効果

カテゴリー	概念	定義	語りの内容
社会生活との関わりを通して、社会とのつながりを意識する(90)	近隣店舗・施設の人と交流する(26)	近隣の店舗・施設を利用したり、挨拶をしたりする。	大人と一緒に買いに行くってこととか、子どもに買ってきてもらうとか。
	地域環境を知る(15)	身近な公共の建物や働く人等の様子を見て、地域社会の環境を知る。	環境認識って言うんだけど、そういうことが垣間見ることができる。
	近隣の人と交流する(13)	近隣の人と挨拶をしたり、会話をしたりする。	子ども達から積極的に「おはようございます、なにしてるの？」って言える。
	乗り物を見る(8)	電車やバス等を見る。	電車が来るとか、あの見れますし、車を見てるとか。
	信号・陸橋を渡る(7)	信号や陸橋等様々なタイプの道を歩く。	信号を渡らせたいがために、そういうコースを(選ぶ)。
	ペットに触れ合う(6)	近隣の人のペットに触れ合う。	イヌ連れてる方も見せてくださったりとかっていうのがある。
	交通ルールを知る(5)	就学に向けて交通ルール指導を受ける。	その都度右を見て左を見て手を挙げるよっていうのもずっと毎日言い続けて。
	他保育所とスポーツを通じた交流をする(5)	他の保育所とドッジボール等を通して交流をする。	公園で待ち合わせたりとか、あの、ドッジボールをやったりとか。
	工事現場・車両を見る(3)	工事現場や工事車両を見る。	工事現場とか、普段は見られないような、もしなにかがあったら。
自然の美しさや不思議に気づく(81)	緊急車両の乗車体験をする(2)	緊急車両の乗車体験をする。	パトカーに乗せてもらって、ご案内を受けたり。
	樹木・草花に関わる(16)	樹木・草花を見たり、触ったり、遊びに用いたりする。	落ち葉のプールとかがもう自然体で出来る。／アジサイを見に行く。
	季節の変化に気づく(14)	自然を通して季節の変化に気づく。	季節感を感じるために行きます。
	雨の中歩く(10)	雨の中雨具を身につけて歩く。	雨の日だと、公園とかではなくって(歩いて散歩する)。
	風や土に触れる(9)	屋外の風や土等の素材に触れる。	土とか自然、水、こういうことってすごく大事だと思ってる。
	畑での活動を行う(9)	園外にある畑で活動を行う。	ペットボトルに水を入れて水やりにここ(芋畑)まで。
	畑の作物を観察する(9)	畑の作物を観察する。	保育園では作ってないような作物もあったり、季節によってはある。
	木の実を拾う(7)	ドングリやマツボックリを拾う。	マツボックリだとか、ドングリもまたいろいろな種類がある。
	生き物に触れる(5)	ザリガニ等の野生生物と触れ合う。	ザリガニが釣れる公園。
体を動かす気持ちよさを感じる(55)	木の実を食べる(2)	食べられる木の実をとって食べる。	桑の実とかが結構なってるので、途中でつまみ食いしながら食べたり。
	固定遊具で遊ぶ(16)	公園の固定遊具で遊ぶ。	低めの滑り台とかがあって。
	体を動かす(12)	身体を動かすことで健康的な体力作りをする。	思い切り体を動かせるね、(中略)曜日によってとかもある。
	傾斜で過ごす(11)	傾斜のある場所を歩いたり、遊び場所にしたりする。	坂道を歩かせたい時にはこういうルートで行って。
	道具を使って活動する(10)	ボール等の道具を持参して活動する。	広場でボール遊びとか。
	広い空間で遊ぶ(5)	広い空間でのびのびと遊ぶ。	広々とね、安全に遊んで。
友達との関わりの中で協同性を育む(17)	水遊びをする(4)	水遊びをする。	水遊びができるので、そこにあと、電車に乗ったり、バスに乗って行ったり。
	集団で歩く練習をする(11)	園行事等に向けて集団で歩く練習をする。	遠足に行く前に行って(中略)歩いて来れたねってところから遠足につなげて。
	友達との相互理解が深まる(3)	友達と手をつないで歩くことで、相互理解を深める。	自分のペースだけでグイグイ行っちゃっている子も(中略)自然で気づける。
外で過ごす気持ちよさを感じる(14)	集団でルールのある遊びをする(3)	かくれんぼ等集団でルールのある遊びをする。	違った場所で、森林の中でかくれんぼをしたり。
	気分転換をする(11)	園外の多様な環境に接することで気持ちを切り替える。	大人にとっても保育士にとっても、やっぱり気分転換になったり。
周囲の環境に積極的に関わるにより思考力を豊かにする(6)	弁当を持参する(3)	園外で昼食を食べる。	お弁当の日なんかはこちらの方まで足を伸ばして。
	散歩の計画を立てる(3)	散歩を子どもが主体的に捉えて散歩へ行く。	次はどこに行きたいっていうのを子ども達とみんなで話し合って。
	新しい発見や気づきを得る(2)	園外環境を通して新しいことを発見したり、気づいたりする。	新しいことを見つげるとか、変化に気付く。
	散歩経験を地図に記す(1)	散歩経験を地図に記す。	探検マップみたいなのを(中略)園便りに載せて(中略)紹介したり。

いることがわかる。先行研究では、子どもと地域住民との交流を「必ずする」「よくする」「たまにする」と回答した保育所の割合は90%を超えている⁸⁾が、地域住民との挨拶に関して「誰に挨拶していいかわからず全員に挨拶していない」との報告もある⁹⁾。一方、保育所の散歩を受け入れている地域住民の視点で見ると、内閣府の20～79歳を対象とした個別面接聴取法による調査では、子育てにおける地域の支えについて「とても重要だと思う」(57.1%)及び「やや重要だと思う」(33.8%)と回答した人の割合の合計は90%を超えている¹⁰⁾。地域住民のうち94%が散歩中の子ども達の存在を気にかけているが、挨拶を交わしたことがある地域住民は57%である⁹⁾との報告もある。このことから、保育者は子どもと一緒に地域住民との挨拶や会話を通して交流を図っているが、交流するタイミングや、不審者等に対する防犯意識等において難しさを感じていることが考えられる。地域住民も地域で育つ子どもの育ちを大切に考え、散歩中の子どもを温かく見守っているといえる。保育所の散歩コースにいた地域住民を対象とした質問紙調査の結果によると、保育所を避難所として利用したいと回答している人は62%であった¹¹⁾。一方の保育所側も災害時の施設について、「全面的に開放」「利用者限定で開放」と回答している割合が60%を超えている¹²⁾。「保育所保育指針」で示されている通り、保育所は地域の子育て拠点の役割を担っており、保育所を利用する保護者だけでなく、地域の子育て中の保護者への支援的関わりも求められている。子育て家庭や地域社会における身近な児童福祉施設としての役割を果たすために、保育者は保育所の子どもと一緒に散歩を通して地域住民と交流をしていることが考えられる。また、「(散歩中に会った近隣住民から)『かわいいなあ』って言うってもらって(中略)喜んだり」(A園)等と、子どもは地域住民から温かい言葉をかけってもらうことで、近隣住民により見守られている安心感を得たり、地域に対する親しみをもったりすることができるといえる。

〈乗り物を見る〉は、0歳児から身近な電車、モノレール、車等の乗り物を見て、社会生活との関わりの基盤を構築している。

〈信号・陸橋を渡る〉は、子どもが自らの生活に関係の深い地域環境である信号や陸橋に触れることで、豊かな生活体験を得ている。

〈ペットに触れ合う〉において、子どもは近隣の人が飼っている犬等の生き物と触れ合ったり、近隣の人が動物を世話する姿を見たりすることで、生き物に親しみをもって接する気持ちを育んでいる。小野・伊志嶺・櫃田の調査でも、86.1%が保育中に近隣住民の庭や飼っている動物を見せてもらう等近隣の人と交流をしていることが報告されている¹³⁾。子どもは散歩中に会える身近な生き物を通して近隣の人の生活に触れ、親しみをもって関わるができるようになると考えられる。

〈交通ルールを知る〉において、子どもは保育者と横断歩道の渡り方等実際の経験を通して、社会生活を送る上で必要な交通ルールを守る意味に気づき、自分の身を守るための交通安全について理解を深めている。

〈他保育所とスポーツを通じた交流をする〉は、保育者が他保育所と連携をすることにより、ドッジボール等のスポーツを通して子ども同士が交流をし、様々な人と関わる力を養っている。

〈工事現場・車両を見る〉は、子どもが図鑑等の紙面では得られない実物ならではの迫力や音等を体感することができ、〈緊急車両の乗車体験をする〉は、子どもが住む地域社会への防災意識や緊急車両への関心を高め、より良い生活環境を築いていこうとする意識の形成に役立つことが考えられる。

3.2 自然の美しさや不思議に気づく

【自然の美しさや不思議に気づく】は、〈樹木・草花に関わる〉〈季節の変化に気づく〉〈雨の中歩く〉〈風や土に触れる〉〈畑での活動を行う〉〈畑の作物を観察する〉〈木の実を拾う〉〈生き物に触れる〉〈木の実を食べる〉の9概念から成る。子どもは保育所周

辺の身近な自然環境に触れて、自然の美しさや不思議に気づく経験をしている。

〈樹木・草花に関わる〉は【自然の美しさや不思議に気づく】においては語りの数が16と最も多い。例えば「色水遊びにオシロイバナを摘んでから、こっちの水道のある公園に行ったり」(F園)や、「アジサイを見に行く」(A園)の語りがある。保育者は保育所周辺の自然を把握することにより、子どもはオシロイバナで遊んだり、アジサイを見に行ったりして身近な自然に親しむことができている。

〈季節の変化に気づく〉において、保育者は「季節感が希薄になってきている」(C園)と危惧し、「その季節にしかなくてないものだったりとか、その季節にしかない状態とか(中略)積極的に感じられるようには意識して」(C園)と述べている。「保育所保育指針解説」¹⁴⁾においても、「保育所の外に出かけると、季節による自然や生活の変化を感じとる機会が多い。子どもが四季折々の変化に触れることができるように、園外保育を計画していくことも必要である」(p.232)と示されているように、保育者は子どもが散歩を通して園外の多様な環境に触れ、季節の変化を感じられるように配慮している。園外環境の中には、春になると満開の桜が目前に広がる桜並木の道があったり、秋になると落ち葉がたくさん集まって天然の落ち葉プールができる公園があったりする。子どもは桜の花びらを集めて砂のケーキに飾ったり、落ち葉プールの中で落ち葉の感触や音を楽しんだりすることができる。子どもは、園内で見たり体験したりできない園外ならではの四季折々の自然に触れ、自然がもたらす光景の美しさに感動したり、不思議さに驚いたりする。このように巡る季節ならではの経験を通して、子どもは季節の変化に気づくことができると考えられる。

また、〈木の実を拾う〉において、保育者は園内に「マツボックリ(が)あんまりない」(A園)と述べた上で、園外環境について「マツボックリだとか、ドングリもまたいろいろな種類がある」(A園)と語っている。また、「ドングリがいっぱいある公園」

(B園)の語りから、保育者は目的に応じて公園を選択しているといえる。森の中で幼児が触れる自然物及び森で展開される遊びを調査した梶浦・今村は、屋外の空間について天候や時間帯、寒暑や日照により変化し、歩く道やその地質、地形によっても、子どもが触れたり遊びに用いたりする自然物は異なると述べている¹⁵⁾。公園によって異なる植生の特徴を活用することにより、子どもは園内環境にはない様々な形の木の実に触れることができる。ドングリやマツボックリのような木の実を用いた製作や遊びは保育現場で多く用いられている。ドングリを転がして速さを競い合ったり、マツボックリに絵の具で色をつけて季節の飾りを作ったりする等の体験を通して、子どもは木の実の形態や特徴に気づくことができる。

〈雨の中歩く〉において、子どもは園行事や就学に向けて雨具を身に着けて園外を歩く経験を積んでいる。また、「長靴で来てもらったり、あともう1足あの長靴のない場合は靴を2足持ってきていただいて」(B園)と、保護者の協力を得た上で、雨や雪の日に園庭を散歩している保育所もある。長靴やレインコート、傘等の雨具を用いて歩くことで、雨音に耳を澄ませたり、カタツムリを見かけたりすることができ、雨が降っていない時の散歩とは異なる特別な体験ができる。子どもはそうした身近な自然体験を通して、保育者が意図する自然に対する美しいと思う気持ちや畏敬の念を培っていると考えられる。

〈風や土に触れる〉において、子どもは園外の風や土に触れることで、身近な自然を感じ取り、心地良さを感じている。

また、園外の畑に関する〈畑での活動を行う〉〈畑の作物を観察する〉は、自園の畑や近隣住民の畑を通して、子どもは日頃食べている野菜に関わり、興味・関心をもつ機会を得ている。「保育所保育指針解説」¹⁴⁾の食育の実施においても、「地域の特性や保育所の状況等を踏まえて、家庭や地域社会と連携を図り、それぞれの職員の専門性を生かしながら、

創意工夫して進めることが求められる」(p. 310) ことが示されている。子どもは身近な地域社会の中で、野菜の栽培・収穫・観察を経験し、様々な食材に触れる機会を得ている。

〈生き物に触れる〉や〈木の実を食べる〉において、子どもは散歩先で偶然出会う生き物との触れ合いを通して命や生態に理解を深めたり、野生の木の実をその場で採って食べる経験をしたりしていることが明らかとなった。

3.3 体を動かす気持ちよさを感じる

【体を動かす気持ちよさを感じる】は、〈固定遊具で遊ぶ〉〈身体を動かす〉〈傾斜で過ごす〉〈道具を使って活動する〉〈広い空間で遊ぶ〉〈水遊びをする〉の6概念から成る。子どもは戸外や園外で、思い切り体を動かす気持ちよさを感じている。

〈固定遊具で遊ぶ〉は【体を動かす気持ちよさを感じる】においては、語りの数が13と最も多い。例えば「低めの滑り台とかがあって」(D園)や、「公園によって特徴があるんです」(B園)の語りから、保育者は近隣の公園の固定遊具等の特徴を把握し、子どもの発達や興味に適した公園を選択していることが明らかとなった。保育所の散歩の中でも目的地の48%は公園であることが報告されている⁴⁾。杉原は全国の幼稚園、保育所の4～6歳児を対象とした運動能力の測定と園の環境調査を行った¹⁶⁾。その結果、一斉的な運動指導よりも子どもの自己決定による身体活動の方が、運動能力が高まることが指摘されている。子どもは公園の固定遊具を用いて自己の興味・関心に基づいて遊ぶ中で、多様な動きを経験し、体の動きを調整する力を身に付けているといえる。

園児数が少ない保育所(D・E・F園)のみ〈身体を動かす〉〈広い空間で遊ぶ〉に関して語っている。これらの保育所の子ども1人当たりに対する各保育所の敷地面積は平均で6.4㎡であり、A・B・C園は平均で298.8㎡であった。〈身体を動かす〉〈広い空間で遊ぶ〉について語ったD・E・F園は、A・

B・C園と比較すると、子ども1人当たりの保有敷地面積が小さく、園外で思い切り身体を動かしたり、広い空間で遊んだりする環境を求めていることが考えられる。松橋・三輪・田中・谷口・大原・藤岡が行った保育所を対象とした質問紙調査の結果によると、保育所が保有する敷地内の屋外活動環境に対する充足度が低い園ほど、保育所から園外へ出て活動を行っていることが明らかとなっている¹⁷⁾。本調査でもC・D・E園は園内で充足できない身体を動かす活動や広い空間で過ごす活動を園外環境で補填していることが考えられる。また、保育者も屋外の広い空間で、子どもが身体を思い切り動かして遊ぶことができるように、日頃から意識的に計画を立てていることが考えられる。

夏場に子どもは公園で〈水遊びをする〉ことを経験している園もある。保育所近隣環境の中から保育者は適切な公園を選択し、環境設定をすることにより、子どもは保育所内で味わうことのできない水を用いた活動を経験している。〈傾斜で過ごす〉において、子どもは坂道を歩いたり、斜面の広がる公園で遊んだりしている。

〈道具を使って活動する〉は、子どもの興味・関心に応じて散歩先にボールや縄跳び等の遊具を持参し、遊びを展開していることが明らかとなった。保育者は「ここのa公園も広場があって、ボールが使えるので、ボールを持ってく時はこちらに行ったり」(F園)等と、活動の内容に応じて保育所近隣の公園の中から活動に最適な公園を選択していることが明らかとなった。石倉は園庭の子どもの遊びについて、場も道具となり得るので、保育者は子どもの活動を可能にする物的環境を整える必要があると述べている¹⁸⁾。散歩においても子どもの興味・関心や、発達等に適した場所の選択が求められているといえる。

3.4 友達との関わりの中で協同性を育む

【友達との関わりの中で協同性を育む】は、〈集団で歩く練習をする〉〈友達との相互理解が深まる〉〈集

団でルールのある遊びをする〉の3概念から成る。子どもは日々の保育を通して友達と集団生活を送る中で、協同性を育む機会を得ている。

〈集団で歩く練習をする〉は【友達との関わりの中で協同性を育む】においては、語りの数が11と最も多い。例えば「遠足に行く前に行って、(中略)歩いて来れたねってところから遠足につなげて」(A園)である。散歩は遠足や園外にある畑へ行くことを想定して、集団で歩く練習の役割を担っていることが考えられる。

〈友達との相互理解が深まる〉では、「友達と手をつないで歩くってことは、(中略)相手のことを考えて歩けるとかにもつながると思う」(D園)の語りが得られた。淀川の保育所2歳児クラスの参与観察によると、体力差の縮まりに加え、他児と歩調を合わせる等、他児との思いを合わせて歩けるようになることで、散歩中の対話が成立するようになることが示された¹⁹⁾。子どもは日々の散歩を通して、自分本位で歩くのではなく、手をつないでいる友達とのやり取りを通して、他者を理解して受け入れる経験を重ねているといえる。〈集団でルールのある遊びをする〉では、鬼ごっこやかくれんぼ等、戸外で友達と関わり合いながら体を動かして遊んでいる。

3.5 外で過ごす気持ちよさを感じる

【外で過ごす気持ちよさを感じる】は、〈気分転換をする〉〈弁当を持参する〉の2概念から成る。子どもは園外への散歩を通して解放感を味わいながら、子どもの興味・関心を喚起する園外環境に触れ、屋外の空間で過ごす気持ちよさを感じている。

〈気分転換をする〉は【外で過ごす気持ちよさを感じる】においては、語りの数が11と最も多い。例えば「大人にとっても保育士にとっても、やっぱり気分転換になったり」(E園)である。子どもだけでなく保育者も散歩を通して園外に出ることで、解放的な園外の空気に触れることができている。

また、〈弁当を持参する〉において、保育者は給

食室と連携をとり、昼食を弁当にして散歩先に持参できるよう配慮している。保育室での通常の昼食ではなく、園外の解放的な空間で、子どもは特別な雰囲気を楽しむながら、保育者や友達と一緒に食べる楽しさや喜びを経験しているといえる。

3.6 周囲の環境に積極的に関わるにより思考力を豊かにする

【周囲の環境に積極的に関わるにより思考力を豊かにする】は、〈散歩の計画を立てる〉〈新しい発見や気づきを得る〉〈散歩経験を地図に記す〉の3概念から成る。子どもは取り巻く環境に好奇心をもって積極的に関わったり、友達の様々な考えに触れたりすることで、思考力が育まれている。

〈散歩の計画を立てる〉は【周囲の環境に積極的に関わるにより思考力を豊かにする】においては、語りの数が3と最も多い。例えば「次はどこに行きたいっていうのを子ども達とみんなで話し合っ」(F園)である。保育者が率先して散歩計画を立てて散歩へ行くのではなく、子どもが遊びたい内容や行きたい場所を提案し、行き方や持ち物等を話し合っって主体的に活動を立案することで、豊かな思考力を育むことができる。

また、〈新しい発見や気づきを得る〉において、子どもは園外の様々な出会いを通して、新しいものに触れて、発見することの楽しさを経験することができる。

さらに、〈散歩経験を地図に記す〉において、子どもは散歩で訪れる場所等を地図に記すことにより、散歩の新たな魅力に気づくことができる。これらを見ることで保護者は子どもの日中の活動に触れることができる。園外で見たものを描いたり、拾った自然物を用いて製作をしたりする等、散歩中の経験を保育に取り入れた活動を展開することは、子どもが身近な園外環境に積極的に関わり、思考力を育む契機になると考えられる。

4. 考察

本研究から、保育所の子どもの発達に与える散歩の効果について検討した。その結果、以下の点について明らかになった。

第一に、全保育所（A～F園）の保育者が〈近隣の人と交流する〉に関して語っていた。子どもは保育者と一緒に散歩中に会う地域住民との交流を通して親しみをもち、見守られている安心感を実感することができる。このような経験を繰り返すことで、子どもは社会生活とのつながりを認識するようになると考えられる。また、地域住民は災害時の避難場所として保育所の利用を求め、保育所も災害時には開放の意向を示している。さらに、保育所は地域の子育て拠点として位置づけられ、近隣の子育て家庭や地域社会における身近な児童福祉施設としての役割を担っている。このような背景から、保育所は地域住民との交流を積極的に行っていると考えられる。

第二に、保育所の保有敷地面積と〈身体を動かす〉及び〈広い空間で遊ぶ〉において、関連が見られた。保育者は子どもの興味・関心やその日の活動のねらい等に応じて、散歩先を検討している。子どもは思い切り走って身体を動かすことにより心地よさを感じたり、開放的な空間の中でのびのびと過ごすことにより健康な体作りをしたりしている。

第三に、保育所の散歩は様々な園外環境が相互に関連し合いながら、子どもの発達を促していることが示された。子どもは近隣住民や近隣施設等との関わりから親しみを感じ、見守られている安心感をもったり、自然や社会の事象に触れることで子どもの興味・関心が喚起されたりする等、多様な環境が子どもを取り囲んでいる。「保育所保育指針」の「環境」の内容について、保育者養成のテキスト²⁰⁾では「自然との関わり、ものとの関わり、数量や文字との関わり、地域や社会との関わり、地域や社会との関わりにおいて、子どもが身のまわりの対象に興味・関心をもって親しみ、何かに気づいたり、工夫

したりする経験が含まれている」(p. 38)と示されている。保育所の散歩を通して、園内だけでは充足できない園外環境を保育に活用することで、より子どもの発達に効果的であると考えられる。

最後に今後の課題について述べる。本研究では、子どもの発達に与える保育所の散歩の効果に焦点を当てたが、保育所周辺の園外環境や保育所の保有敷地面積による園内環境に応じて散歩の在り方は異なることが考えられる。今後は保育所の地域タイプや保育所の保有敷地面積と散歩の関連性について検討する必要がある。

謝辞

本研究の調査にあたり、ご協力いただきました保育所の皆様に深く御礼申し上げます。

文献

- 1) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課. 保育所関連状況取りまとめ(平成30年4月1日). 2018;(オンライン)
<<https://www.mhlw.go.jp/content/11907000/000350592.pdf>>. (参照2018.10.4.)
- 2) 厚生労働省. 保育所保育指針. 東京, フレーベル館; 2017
- 3) 菅田栄子. 保育用語辞典[第7版]. 森上史郎・柏女霊峰(編). 東京, ミネルヴァ書房. 2013; 100
- 4) 太幡英亮・古川智之・恒川和久・生田京子・谷口元. 保育園児の散歩行動と街路環境の関係—名古屋市認可保育所での散歩行動観察を通じて—. 日本建築学会計画系論文集. 2013; 78(689): 1533-1542
- 5) 小池孝子・定行まり子. 都市部における保育施設の屋外保育環境について: 東京都区部における複合型保育所の施設環境に関する研究 その2. 日本建築学会計画系論文集. 2008; 73(628): 1197-1204
- 6) 辻川ひとみ・中野明. 「個人実施型」家庭的保育施設の戸外活動と地域資源の関係に関する研究. 帝塚山

園外活動における子どもの発達を促す地域環境

- 大学現代生活学部紀要. 2016 ; 12 : 49-56
- 7) 大谷尚. 明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法. 感性工学. 2011 ; 10 (3) : 26-28
- 8) 三輪律江・尾木まり・高辻千恵・田中稲子・谷口新・松橋圭子. 保育施設の「屋外遊戯場」としての公園の代替利用に関する研究 : 地域の住環境計画の視点による住区基幹公園活用を目指して. 住総研研究論文集. 2009 ; 35 (0) : 131-142
- 9) 長谷川育代・高橋久雄・松田典子・高橋紘・三浦修子・廣瀬優子・高橋滋孝・高橋智宏. 保育所と保育士養成校の連携による地域における子どもの安心・安全, 人的環境のあり方に関する研究. 保育科学研究. 2013 ; 4 : 37-51
- 10) 内閣府政府統括官 (共生社会政策担当). 地域での子育て支援環境づくりについての意識. 内閣府政府統括官 (共生社会政策担当). 平成 25 年度「家族と地域における子育てに関する意識調査」報告書全体版. 2014 ; (オンライン)
<<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/research/h25/ishiki/pdf/2-3.pdf>>. (参照 2018. 1. 31)
- 11) 長谷川育代・高橋久雄・松田典子・高橋紘・三浦修子・廣瀬優子・高橋滋孝・高橋智宏. 保育所と保育士養成校の連携による地域における子どもの安心・安全, 人的環境のあり方に関する研究. 保育科学研究. 2013 ; 4 : 37-51
- 12) 稲垣景子・三輪律江. 就学前児童施設の防災活動に関する実態調査 : 共助の取り組みに着目して. 学術講演梗概集. 2015 : 349-350
- 13) 小野壽美・伊志嶺美津子・櫃田紋子. 家庭型保育における地域交流に関する調査. 横浜女子短期大学研究紀要. 2004 ; 19 : 55-67
- 14) 厚生労働省. 保育所保育指針解説. 東京, フレーベル館 : 2018
- 15) 梶浦恭子・今村光章. 「森のようちえん」の幼児が触れる自然物に関する実証的研究. 環境教育. 2015 ; 25 (1) : 176-183
- 16) 杉原隆. 運動発達を阻害する運動指導. 幼児の教育. 2008 ; 107 (2) : 16-22
- 17) 松橋圭子・三輪律江・田中稲子・谷口新・大原一興・藤岡泰寛. 保育施設における屋外環境と園外活動の実態からみた地域資源のあり方に関する研究—横浜市を対象としたアンケート調査より—. 日本建築学会計画系論文集. 2010 ; 75 (651) : 1017-1024
- 18) 石倉卓子. 幼児の育ちに必要な園庭環境の検討—表現行為を可能にする自然材と道具の関係性—. 保育学研究. 2012 ; 50 (3) : 18-28
- 19) 淀川裕美. 2-3 歳児の保育集団での散歩場面の対話のあり方の変化—身体的位置, 媒介物と話題, 模倣/非模倣の変化に着目して. 乳幼児教育学研究. 2013 ; 22 : 63-76
- 20) 福元真由美. 保育内容の 5 領域における「環境」. 無藤隆 (監)・福元真由美 (編). 新訂 事例で学ぶ保育内容〈領域〉環境. 東京, 萌文書林. 2018 ; 38

Abstract

Local Environment Effects Children's Affects Nursery Schoolchildren's Development Among out-of-Nursery School “The Growth of Children through Outdoor Walking”

Chie Yamada^[1], Noriko Jitsukawa^[1], Kanako Takagi^[1],
Hitomi Kurihara^[1], Yoshiko Takano^[1], Kazuko Koike^[2]

[1] Faculty of Child Development and Education, Uekusa Gakuen University

[2] Faculty of Health Sciences, Uekusa Gakuen University

This study examined the effects of a particular outdoor activity, walking, on the development of nursery-school students based on data collected during semi-structured interviews with nursery-school teachers. Data were analyzed qualitatively using the Steps for Coding and Theorization (SCAT), and the analysis generated 32 concepts and six categories.

All nursery-school teachers engaged in <social interactions with neighbors>, which allowed students to experience a sense of safety and to recognize the importance of interpersonal connections. During these outings, the teachers also talked about <moving the body outside> and <playing in the outdoor open space>. The activities compensated for the restricted space available in the nursery-school environment. Thus, this activity enabled students to experience a variety of environments that promoted their development.

Keywords: out-of-nursery school, outdoor walking, local environment, nursery-school environment, nursery schoolchildren's development

